

◆マッセOSAKA公募論文 最優秀エッセイ賞受賞エッセイ◆

ブックトーク：「新しく自治体職員になった
みなさんへ（福祉事務所編）」

羽曳野市役所保健福祉部福祉総務課

細井正人

図書館では、本があるというだけでなく、本の世界を広げていくというのも、大切な仕事のひとつ。

貸出返却の時に、さりげなく「こんな本もありますよ」と紹介したりすることもよくあること。つまり「司書」というレンズを通して、利用者はその後ろに広がる本の広大な世界を知ることができる（はずだ）。すくなくとも司書はそのような思いを持って仕事している。

その種の直接的でわかりやすい仕事のひとつが「ブックトーク」である。一般には、子どもたちを対象に行われることが多い。ある一つのテーマを決めて、何冊かの本を紹介していく。たとえば、「宇宙をさぐる」「広い世界をながめてみると」などなど。ある本はその一部を読んで、ある本は挿絵を見せて、興味を持って「読みたい」と思えるように、紹介していく。その際、一冊の本からもう一冊の本へと移行する時、なめらかにつながるような紹介の仕方をしていく。そのあたりの技術はまさに司書という専門職の醍醐味だと思う。

そこで、今回はブックトークに挑戦である。

ここは地方自治体A市の福祉事務所の新規採用職員研修会会場である。A市立図書館の司書が、居並ぶ新規採用職員の前にやってきて、今まさに何かを始めようとしている。壇上の職員は、たくさんの付箋の貼られた何冊かの本をかかえている。やがて、それらを机の上に置いてしゃべり始めた。

皆さんはこうして、ようやく一つの仕事をつかむことができました。半年はあっという間ではなかったでしょうか？でも、大変だったでしょうね。よくがんばりました。今はどんな気分ですか？あともう少しで6か月。やっと本採用だ。これで一安心ってところでしょうか？

ちょっと社会に目を向けてみましょう。毎日のニュースでは何が話題になっていますか？今、この社会で起こっていることはどういうことでしょうか？一生懸命働けばなんとか食べていける、とついこの間まで皆、信じて頑張っていました。それが「ワーキングプア」と呼ばれる言葉とともに、おかしなことになってきました。「はたらけど はたらけど猶（なお）わが生活（くらし）楽にならざり じっと手を見る」。こんな時代がまたやってきたのでしょうか？今のは石川啄木の歌です。有名な歌集『一握の砂』の中の「我を愛する歌」のなかのひとつです。また、彼はこんな題のエッセイも書いています。「時代閉塞の現状」。まさに、現在を言っているような題ではないでしょうか？これが、今から何年前だとおもいますか？これが発表されたのは、なんと1910年頃、約100年前のことでした。信じられますか？その頃はまだ社会制度としてのセーフティネットは当然ながらありませんでした。

今なら、生活が苦しい時、私たちはどんな制度を

活用できますか？「生活保護」がまさにそうです。けれども果たして、この最後のセーフティネットと言われる「生活保護」は有効に機能しているのでしょうか？ここにはケースワーカーの皆さんもいらっしゃいます。実感としてそれを感じていらっしゃいますか？仕事に追われてそれどころではないという人も多いでしょう。

そんな方には、この『反貧困』（岩波新書）をぜひ読んでほしい。今ではかなり有名になった著者の湯浅誠さん。彼の日頃の「もやい」の実践の中から感じ取ったそのことばには説得力があります。彼が大切だと言っているのは「溜め」という概念。人間にはこの「溜め」が必要なんだと主張しています。それは、お金であったり、ねぐらであったり、友人であったりします。ちょっと読んでみます。「このように“溜め”は、外界からの衝撃を吸収してくれるクッション（緩衝材）の役割を果たすとともに、そこからエネルギーを汲み出す諸力の源泉になる」というわけです。この「溜め」がないことで、今の日本は「すべり台社会」であると。つまり、足をすべらしたら、とどまることなく転げ落ちていく。それを「すべり台」と言っているわけです。本書の中ではこんな指摘もあります。「“溜め”を見ようとしなない人たち」という見出しの一文の中では、われわれ行政職にも「“溜め”を見る努力が求められる」と書かれています。この指摘をわれわれはいかに受け取るべきでしょうか？

この本でも指摘していますが、貧困は大人にとどまらない。むしろ子どもへも連鎖している。

これを「世代間連鎖」と言うそうです。このうちの「子ども」をピックアップしたのが、阿部彩さんの『子どもの貧困』（岩波新書）です。副題は「日本の不公平を考える」となっています。驚くべきことに、この日本は、再分配前所得における貧困率と再分配後の貧困率を比べると後者の方が高いそうなんです。ちょっと読んでみます。ここですね。「社会保障制度や税制度によって、日本の子どもの貧困率は悪化しているのだ！」。つまり、国の関与によって、状況はより悪くなっているということなのです。なんということでしょう。何もしない方がましの政策

ということなのでしょう。

この本では、具体的な数値で実証し「子どもの貧困」を解き明かし、さらに重要なのは解決の方策まで提起していることです。それが第7章に「子ども対策」に向けて」と題して書かれています。

まあ、だけれども一地方自治体がわあわあ言って、何とかしようといったって限界がある。無理じゃない？と感じる方もいるかもしれません。そんな方には著者のこの言葉を贈ります。

「いたしかたがない」と許容するのではなく、少しでも、そうでなくなる方向に向かうように努力するのが社会の姿勢として必要ではないだろうか」

さて、つぎも新書です。単行本だと持ってくるのが重いからこんな小さなばかり持ってきたわけじゃないですよ。新書はいまたくさん出版社から、それこそ毎日のように出版されていますが、玉石混交です。しかし、コンパクトながら知のギュッとつまんだ多くの良書があります。

この『現代の貧困』岩田正美（ちくま新書）もその一つ。福祉事務所にお勤めなら、著者の名前は一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか？さきに紹介した『反貧困』の中では、生活保護はそれを必要とする人に行き渡っているのだろうか（つまりこれを捕捉率というのですが）、ということで15～20%という学者の説を紹介しています。少し怖くなってきますよね。あなたの生活保護のイメージはどんなものなのでしょうか？ちょっと手を挙げてみてください。まず「できるだけ受けたくないもの」……は、多いですね。じゃあ、次「どうしようもなくなったら相談するもの」。はい、ありがとうございます。そうですね、こんなところが一般的でしょうか？でもそれではだめなのです。「どうしようもなく」なる前に使えないと意味がない。だってこれはセーフティネットなのですから。本書では、「貧困」の「再発見」をしつこくやったか、きれいさっぱり忘れたか」の違いは、「豊かさ」の中に潜む貧困を「再発見」しようとする「目」や「声」が社会にあったかどうかにかかっているのではないかと書いています。私たちにとっては、少し居心地の悪い指摘ではないでしょうか。

視点を少し変えてみましょう。福祉社会ってなんでしょう。漠然としていますよね。その福祉社会について、「事後から事前へ」「フローからストックへ」というキーワードを提示するのは、『持続可能な福祉社会』（ちくま新書）の広井良典です。これはどういうことかという、「これまでの社会保障は市場経済を前提として、これによって生じる」弊害を「事後的に是正」するものであった。でも今後は「事前的な」また「資産の分配のあり方など「ストック」も視野に入れることが「大きな課題」になってくるというわけです。ちょっと難しいですね。経済学や哲学も含んだ彼の独特な視点は、純粋な「福祉」という範疇にとどまらないスケールの大きいものです。彼にはほかにも多くの著作があります。『ケアを問いなおす』『死生観を問いなおす』（以上、ちくま新書）など。最近『コミュニティを問いなおす』（ちくま新書）も出版されたばかりです。一度手に取ってみてください。

でも、いくら福祉事務所の職員だからって、専門に関する本ばかり読んでたらつまらない。あと、2年もすれば異動だしね。なんて思っている方もいらっしゃるかもしれません。視野を広げることはほんとに大切だと思います。

私は小説も大好きです。で、井上ひさしは好きな作家のひとり。この人の小説はほんとにおもしろい。面白くって読み応えがある。それはこの人の頭の中に古今東西の本から「盗んだ」エッセンスが詰まっているからだと思います。『本の運命』は彼の本についてのエッセイ。膨大な読書から育まれるものは知識だけではないでしょう。そんなことがこの『ボローニャ紀行』（文芸春秋）にも読み取れます。単なる旅行記じゃないの？なんて言わないでください。読みやすい文章で書かれていて気軽に読める本ですが、皆さんはこの本から何を感じ取るでしょうか。私はこれをまちづくりの部署にいる方に読んでもらいたいと思いました。

ボローニャというヨーロッパ最古の大学があるイタリアの古い街がどのように変わって（あるいは再生して）いったか、そして今どういう場所になっているか。「ボローニャ方式」という街の再生とはいっ

たいどんなやり方なのか、ぜひ読んで確かめてみてください。

私の解釈では、これはいわば「温故知新」ではないかと思います。もう一つは、最近、はやりのキーワードになっていますが「持続可能」ですね。これがここにはみごとに描かれています。いや、これは空想の小説ではなく、現実の「まち」を描いているのです。ここにあるのは、まぎれもない現実。ここから学ぶものはほんとに多いと思います。

それぞれの本には、いろいろな「思い」が詰まっています。一人の著者が考えている「思い」を読者は、自分の「思い」と重ね合わせ吟味し、取捨選択し、また練り直し、新しい「思い」を作っていきます。読書することはそんなことの繰り返し、格闘でもあります。ぜひ皆さんもたくさんの本を読んでみてください。そして、語り合ってください。日々の仕事に追われているからこそこそうした時間を持つことはとても重要です。給与もなかなか上がらない昨今です。

「財布を捨てて図書館へ行こう」。

みなさまのお越しをお待ちしています。図書館は無料です。知のセーフティネットです。今日お配りしたブックリストには、紹介した本の他に、おすすめの本も載せています。興味があれば手に取ってみてください。

ありがとうございました。

ブックリスト

○今日、紹介した本（最後の数字は刊行年です）

『啄木歌集』石川啄木（岩波文庫）1946

このほかに新潮文庫等もあります。

『時代閉塞の現状』（『明治の文学 第19巻 石川啄木』坪内祐三・編（筑摩書房）2002所収）

『時代閉塞の現状、食うべき詩』（岩波文庫）もあります。

『反貧困 「すべり台社会」からの脱出』湯浅誠（岩波新書）2008

『子どもの貧困 日本の不公平を考える』阿部彩（岩波新書）2008

『現代の貧困 ワーキングプア／ホームレス／生活保護』岩田正美（ちくま新書）2007

『持続可能な福祉社会 「もう一つの日本」の構想』広井良典（ちくま新書）2006

『ケアを問いなおす 〈深層の時間〉と高齢化社会』広井良典（ちくま新書）1997

『死生観を問いなおす』広井良典（ちくま新書）2001

『コミュニティを問いなおす』広井良典（ちくま新書）2009

『ボローニャ紀行』井上ひさし（文芸春秋）2008

『本の運命』井上ひさし（文芸春秋）2000

○もっと自治体について知りたい方へ

『自治体をどう変えるか』佐々木信夫（ちくま新書）2006

これからの自治体経営をどうしてかコンパクトにまとめられています。

『地域再生の経済学 豊かさを問い直す』神野直彦（中公新書）2002

財政学者である著者ですが、「知識社会」を核としたヨーロッパ型の将来像は魅力的です。蛇足を承知で言わせてもらおうと、その「知識社会」には「図書館」は必要不可欠な重要なものとして存在するべきです。この他にも魅力的な著書がたくさんあります。要チェック！の学者です。

『日本の自治・分権』松下圭一（岩波新書）1996

分権時代に問われるのは何かを、原則的なところから掘り起こしています。

『自治体連続破綻の時代』松本武洋（洋泉社）2006

題名だけで読んでみたいと思うのでは？自治体を監視するための市民のマニュアルでもあります。ということとはやはり自治体職員にも示唆に富んだ内容なのです。

『ルポ 貧困大国アメリカ』堤未果（岩波新書）2008

このアメリカ合衆国像は、明日の日本のそれかもしれないと思いながら読むと怖くなるのですが…。

『財政のしくみがわかる本』神野直彦（岩波ジュニア新書）2007

ジュニア新書だからといって見逃す手はありません。このシリーズには他にも参考になる本がたくさんあります。

※以上の本はすべて図書館にあります。

ない場合はご予約をして下さい。

また、府立図書館の蔵書も取り寄せできます。

その他なんでも、お気軽におたずねください。